

にいがたデジコングランプリ2017
オープンデータ活用企画書部門

**非常時の活用のためのAED情報アプリ
『AED救援サポーター』**

オープンデータ活用アプリ企画アイデア

2017.09

増田 美砂

AED救援サポーター

先日、路上で心臓発作で意識を失った方が、偶然通りがかった方の救命措置と、近所の方が持って駆けつけたAEDのおかげもあり、奇跡的に一命を取り止めた、というニュースが印象に残りました。

私の職場にもAEDが設置されていますが、もし近所でAEDを必要とする方が出た時には、このような形で行動することができるのだろうか…と考えさせられました。

左図は、心停止から電気ショックまでの時間と救命率を示したもののことですが、まさに1分1秒でも早いAEDの使用が生死を分けることを表しています。

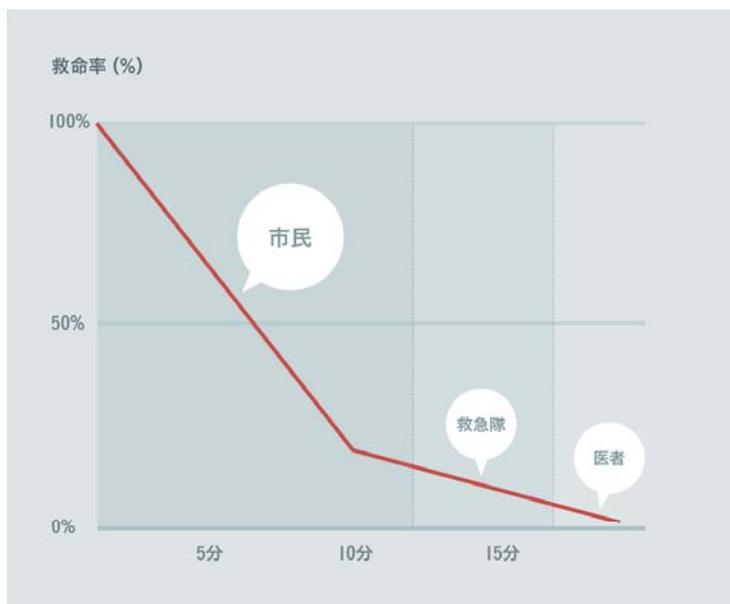
現在、市町村等でオープンデータを活用して、AEDの所在地を示したマップアプリなどは多くありますが、どちらかといえば、普段からの所在地確認と意識づけのためのツールであって、緊急時の、まさに「その時」のための用途のものではないものが多いように感じます。

例えば、実際に必要となる現場に居合わせた時…、意外と近くで必要となる事態が、まさに起こっている時…

そんな時に活用できるものにするためには…？

救急隊が到着するまでの時間を、何かできることはないのか…？

そんな考えから考えたオープンデータ活用アプリの展開アイデアが『AED救援サポーター』です。



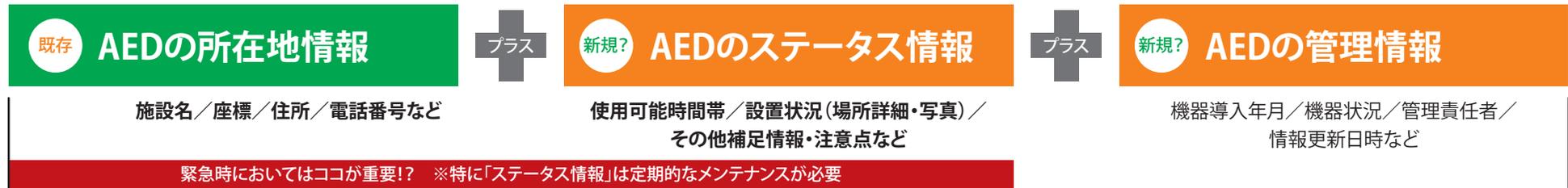
1) 総務省消防庁：平成28年版救急・救助の現況

上図は心停止となってから電気ショックまでの時間と救命率を示したものです。電気ショックが1分遅れるごとに救命率は10%ずつ低下します。119番通報をしてから救急車が到着するまでの平均時間は8.6分(1)。救急隊や医師を待っているだけでは命を救うことはできません。突然の心停止を救うことができるのは、その場に居合わせた「あなた」しかいないのです。

一般財団法人 日本AED財団 WEBサイトから引用 <http://www.aed-zaidan.jp/>

■ コンセプト

★ 活用するオープンデータ



AED救援サポーター

★ 目的

- ◆ 本アプリを通して、地域でAEDの情報を共有し、AEDを必要とする人の『HELP!』を、ボランティアの救護支援者につなぐ体制をつくる。
- ◆ 日常から、『いざ』という時を想定することで、非常時の心構えや助け合いの精神といった一人ひとりの意識づけを行う。

★ ターゲット：アプリを活用してもらいたい人

◎ 救援要請者 → 持病や健康への不安を抱える人の周辺者(家族・同僚など)

つまりいざというときにAEDを使いたい人

例：心臓に持病がある方や高齢者の家族(本人ではなく)

例：炎天下などでの屋外作業やクラブ活動などの管理者など

◎ 救護支援者 → AEDが保管された施設の関係者および近隣住民

つまりいざというときにAEDを届ける人

例：日頃AEDが設置された場所にそばにいて、いざという時に駆けつけることができる人

例：AEDをつかった救命講習の受講者などAEDへの理解・意識が高い人

★ アプリ活用フロー

0 『救護要請者』『救護支援者』は予めアプリをインストールし、ユーザー登録を行う。(※アプリは通常時は地図上からAEDの所在・設置情報の確認が可能)

- 1 AEDが必要となる緊急場面に遭遇した『救護要請者』はアプリを起動して**緊急要請ボタンを押し**。
- 2 発信された緊急要請は、サーバ・データベース上で、AEDの設置稼動状況(オープンデータ)とアプリ登録者の所在地情報(GPS情報等)を照合。
- 3 『救護要請者』の救援圏内(半径●メートル)内の使用可能AEDと、さらにそのAEDへのアクセス圏内(半径●メートル)の**条件に合致するアプリ登録者に救援要請を発信**。
- 4 該当するユーザー(救護支援者)のスマートフォンに**救援要請が着信【プッシュ通知】**
- 5 救援要請を受けた『救護支援者』は、内容(要救援者の場所/最寄のAEDの場所など)を確認の後、**選択メニューから対応可否および対応状況を返信・報告**。
- 6 対応可能なユーザーは「AEDに向かっています」のメニューで返信を行い、AEDへ急行する。
(アプリで**AEDと要救護者までの最短経路をナビゲート**する)
- 7 『救護支援者』からの**状況報告は適宜通知され、各対応者間で共有**される。
また救助要請者一各対応者間で状況と必要性に応じて音声通話を行うことで、対応をスムーズにする。



